

# マルティン・ルターと死者の「死」(2)

中 谷 博 幸

はじめに

第一章 煉獄を中心とする生者と死者の関わり

第一節 ダンテ『神曲』における煉獄のイメージ

第二節 煉獄と悔悛の秘蹟

第三節 生者の執り成し

第四節 煉獄と贖宥

第五節 煉獄を支える教義

第二章 対カトリック論争書における死者

第一節 贖宥批判

第二節 死者のためのミサ批判

第三節 煉獄批判 (以上『香川大学教育学部研究報告第一部』123号、2005年3月)

第三章 書簡における死生観

第四章 告別説教における死生観

第一節 ザクセン選帝侯ヨハンの葬儀における説教

第二節 死への備え

第五章 『卓上語録』における死者

第一節 「死者」の存在と悪魔の働き

第二節 自殺の理解

おわりに

(以上、本号)

## 第三章 書簡における死生観

1517年の贖宥批判に始まって、1520年代を通じ、生者が死者の救済のためになす業は無意味であるばかりか、神の教えに逆らうものであることを、ルターは対カトリック批判書において明らかにしようとした。第二章で述べたように、生者から死者への働きかけの否定に関しては、1530年の『煉獄の廃棄』でもって、一応論点が出尽くしている。ルターはこの時まで、死者への祈りや徹夜課、死者のためのミサを批判し、煉獄の存在をはっきりと否定した。

1530年代には、死者をめぐる別の問題が持ち上がってくる。死者はどのような状態にいるのか、また生者は死者とどのような繋がりをもつことができるのかという実践的な問題である。生者は近親者をなくした悲しみに襲われるので、単に生者は死者に働きかけることはできないというのでは、問題が解決しないからである。死者の状態については、基本的な見解をルターはすでに1520年代に形成していた。第二章で述べたように、1522年1月13日付のニコラウス・フォン・アムスドルフ宛書簡で、個人的な考えとしてはあるが、死者は「感覚なく眠っているというのが確かなように思

います」と述べた。その後、1525年の四旬節説教で、ルターは公に、死を眠りにとらえる考えを表明した。このような死者の状態に関する見解を軸に、生者と死者とはどのような絆をもちうるのかという実践的・牧会的問題への解答が1530年代以降表明されていく。

「はじめに」で述べたように、ルターは近親者をなくした多くの人々に慰めの手紙を送った。次の表は、ワイマール版全集の書簡集に収められている慰めの手紙の一覧である。それらの他にも失われた書簡もあるが、現在残されている慰めの手紙は、1530年以降に集中している。これらの慰めの手紙が、死者の状態と生者と死者との繋がりという実践的問題を正面から取り上げている。次にこれらの書簡において、ルターがどのような死生観を展開しているかを検討したい。

書簡の相手は当然のことながら友人、知人が多いが、ヴィッテンベルク大学学生の親や、見知らぬ人もいて、多様である。以下、1542年12月26日付のユストゥス・ヨナス宛て書簡を中心に、遺族

ワイマール版書簡集に収められている遺族への慰めの手紙

	日付	宛先	死者	全集箇所
1	1525. 5. 15	ザクセン選帝侯 Johann	前選帝侯	Nr. 867 (Br. 3, 496f.)
2	1525. 5. 15	選帝侯 Johannの長男Johann Friedrich	前選帝侯	Nr. 868 (Br. 3, 497f.)
3	1528. 12. 15	Margarethe N. 不明	夫 (自殺)	Nr. 1366 (Br. 4, 624f.)
4	1530. 4. 20	Konrad Cordatus ツヴィカウの説教者	息子	Nr. 1544 (Br. 5, 273)
5	1530. 5. 19	Justus Jonas ヴィッテンベルク大学教授	息子	Nr. 1571 (Br. 5, 323f.)
6	1530. 6. 5	Wenzeslaus Link ニュルンベルクの牧師	娘	Nr. 1583 (Br. 5, 349f.)
7	1531. 10. 21?	Matthias Knutzsen とその妻Magdalena ヴィッテンベルク大学学生の両親	息子	Nr. 1876 (Br. 6, 212f.)
8	1532. 4. 1	Ambrosius Berndt ヴィッテンベルク大学学芸学部教師	息子	Nr. 1915 (Br. 6, 279ff.)
9	1532. 4. 22	Thomas Zink in Hofheim ヴィッテンベルク大学学生の父	息子	Nr. 1930 (Br. 6, 300ff.)
10	1532. 11. 3	Lorenz Zoch 元マグデブルク大司教領のKanzler	妻	Nr. 1971 (Br. 6, 382f.)
11	1532. 12. 7	Lorenz Zoch 第二書簡	妻	Nr. 1978 (Br. 6, 392f.)
12	1534. 8. 25	Autor Broitzen in Braunschweig ヴィッテンベルク大学卒業生	妻	Nr. 2133 (Br. 7, 95f.)
13	1535. 10. 25	Agnes Lauterbach in Leisnig 不明	息子	Nr. 2265 (Br. 7, 305)
14	1536. 4. 18	Hans Reineck マンスフェルトの精錬所親方	妻	Nr. 3015 (Br. 7, 399f.)
15	1542. 5. 8	Johannes Cellarius の妻 Cellariusはドレスデン教会の監督	夫	Nr. 3751 (Br. 10, 63f.)
16	1542. 12. 26	Justus Jonas ハレ教会の監督	妻	Nr. 3829 (Br. 10, 226-228)
17	1543. 9. 11	Wolf Heinze ハレのオルガニスト	妻	Nr. 3912 (Br. 10, 394f.)
18	1543. 12. 27	Nikolaus Medler in Naumburg	息子	Nr. 3951 (Br. 10, 479ff.)
19	1544. 10. 8	Georg Schulzの未亡人 1535年までヴィッテンベルクで下宿を営む	夫	Nr. 4034 (Br. 10, 663f.)
20	1544. 12. 13	Georg Hoesel マリーエンベルクの鉱山書記	息子	Nr. 4049 (Br. 10, 698f.)
21	1545. 3. 9	Georg von Anhalt侯	Georg Helts	Nr. 4080 (Br. 11, 47f.)
22	1545. 4. 24	Kaspar Heidenreich フライブルク宮廷説教者	息子	Nr. 4094 (Br. 11, 75f.)
23	1545. 6. 3	Andreas Osiander ニュルンベルクの宗教改革者	妻と娘	Nr. 4122 (Br., 11, 113f.)

への慰めの手紙にあらわれたルターの死生観の特徴を考察することとする。この手紙は最も典型的なもののひとつである。書簡の受取人のユストゥス・ヨナスはエアフルトとヴィッテンベルクで学んだ後、1518年にエアフルト大学の教会法教授となり、1521年以降はヴィッテンベルク大学に移って、ルターをよく理解してその活動を支えていった人物である。1493年の生まれで、ルターよりも十才若年であったが、個人的に親しい友人でもあった。1546年にルターが故郷アイスレーベンで死んだ時には、ヨナスはルターの最後を看取るとともに、アイスレーベンでの葬儀の説教も担当する<sup>1)</sup>。ルターがこの慰めの手紙を書いたときは、ハレの教会の監督であった。前年に彼はハレに移っていて、翌年の1542年に子どもが生まれるが、その時の出産が原因で妻カタリーナが死亡し、ルターたちは突然その知らせを受け取ったのであった。ルターは次のように書いている。

あなたにふりかかった予期せぬ災難によって私は全く打ちひしがれ、何を書けばよいのかわかりません。あなたの人生の最愛の伴侶の死により私たちはみな喪失感をぬぐうことができません。夫人は本当に私にとって大切であったばかりでなく、その快活な性格はいつも大きな慰めでした。特に喜びであれ悲しみであれ、自分自身のものであるかのように、それらを私たちと分かち合ってくれました。それは本当につらい別離です。私がこの世を去った後、彼女が、あらゆる女性の中で、残された人々の最も良き慰め手となってくれるであろうと思っていました。私は、彼女の優しい精神、静かな物腰、誠実な心のことを考えると、悲しみに打ちのめされます。あのように敬虔と高貴と謙遜と友情にみちた女性を失った悲しみのため、私は激しい苦痛にみまわれています。

・・・このような時に慰めは肉 (caro) において見いだすことはできません。私たちはそれを霊 (spiritus) において、私たちすべてを召し彼がよしとされた時に私たちをこの世の悲惨と邪悪さから彼ご自身のもとへと引き出されるお方のもとへ、彼女が行ったのだということを理解することによって、見いださねばなりません。アーメン。

あなたが嘆くのは当然です。しかし、あなたが嘆く時、私たちキリスト者の共通の運命のことを心に留められるようにと祈ります。別離は肉によればたいへんつらいものですが、来世において私たちは再会し、集められ、私たちを愛しご自身の血と死によって私たちのために永遠の生命を獲得して下さったお方との最も甘美な交わりに入れられます。「もし私たちが彼とともに死ねば、彼とともに生きるようになる」、と聖パウロは言っています。・・・

しばらくの間嘆き悲しんだ後、私たちは言い様のない喜びに浸ることでしょう。・・・

・・・主があなたの肉を慰められるように祈ります。霊は、敬虔で善き婦人があなたのそばから天国と永遠の生命へと移されたことを考える時、喜ぶべき理由をもっています。このことを疑うことはできません。何故なら、夫人はそのように敬虔で聖なる言葉をもって信仰を告白しながら、キリストの胸の中に眠りました。私の娘もまたこのようにして眠りました。それが私の最大で唯一の慰めです<sup>2)</sup>。

ルターはなくなったヨナスの妻カタリーナのことを思い出し、ルター自身彼女を失った激しい苦痛に打ちのめされていることを語り、ヨナスが別離を嘆くのは「肉によれば」もっともだと共感する。遺族にとって嘆くのは当然であり、必要ですらあることを、ルターは多くの手紙で繰り返し述べている。ヨナス宛の手紙でも触れられているが、ルター自身二人の娘をなくしていた。彼は長女エリーザベトを1528年8月3日にわずか一歳でなくし<sup>3)</sup>、次女マグダレーナを1542年9月20日に13才で失った。夫人をなくしたヨナスにこの手紙を書くおよそ三ヶ月前の9月23日に、ルターはヨナスに次のような手紙を書き送っている。

私の最愛の娘マグダレーナがキリストの永遠の王国へ再生したといううわさがあなたのもとにとどいていることと思います。私と妻はそのような幸福な出発と祝福された終わりとに対して感謝をささげるべきなのでしょう。マグダレーナはそのことによって肉やこの世、トルコ人、悪魔の力から逃れることができたのですから。しかし、肉親の愛は大きく、心の中で叫び嘆くことなしには、あるいは私たち自身の死を経験することなしにはこのことをなしえませんが、このこと、たいへん従順で人々を敬った娘のしぐさや言葉や動作が心の奥深く刻まれています<sup>4)</sup>。

1544年にヴィッテンベルクの学生、ヒエロニムス・ヘーゼルが急死した時、ルターはその父親ゲオルクと面識はなかったが、息子の死を知らせる手紙を送り、そこでも次のように書いている。

私もまた一人の父親であり、私自身の子が一人ならず亡くなるのを体験してきております。また、死よりも厳しい逆境も経てきています。私は、これらの事柄が、いかに痛ましいものであるかをよく知っています。しかし私たちはその痛みを耐えて、永遠の救いの知識をもって慰められねばなりません。神は、私たちが自分たちの子どもを愛することを望まれ、子どもたちが私たちの手から取り去られたときは、嘆くことを望んでおられます。しかし嘆きは限度を超えたりあまりにも激しくなるとはいけません。そうではなくて永遠の救いの信仰が私たちを慰めるべきであります<sup>5)</sup>。

神は嘆くことを望んでおられるが、その嘆きは限度を超えてはならない。「霊における」喜び、「永遠の救いの信仰」が慰めとならねばならない。ヨナス宛の書簡の最後のパラグラフで、ルターは、カタリーナが「敬虔で聖なる言葉をもって信仰を告白しながら、キリストの胸の中に眠りました。私の娘もまたこのようにして眠りました。それが私の最大で唯一の慰めです。」と語る。ルターは生前の意識のしっかりした時の信仰告白を重視する。彼は1531年と1532年にも、死亡した学生の親に慰めの手紙を書いているが、その中で強調されているのはその点である。ヴィッテンベルク大学の学生、ヨハネス・クヌッツェンの両親にルターは、次のように書いた。

ご子息は、疑いなく、キリストにあつて永遠の憩いのもとにいて、快く穏やかに眠っていることを、是非感謝して下さい。生前彼はたえず祈りにはげみ、最後までキリストへの告白に忠実でした。だれもがその大いなる恩寵に感嘆していたものです<sup>6)</sup>。

同じく、ヨハネス・ツィンクの父トーマスに、ヨハネスが「そのようなすばらしい信仰と認識と告白をもって、息を引き取ったというよりもむしろ、穏やかで静かに眠りました」と告げている。ヨハネス・ツィンクは、生前ルターの家でしばしば夕べをともにし、歌っていたとルターはその手紙で書き記している<sup>7)</sup>。

生前にしっかりと信仰告白をした者は、「この世の悲惨と邪悪さ」から解き放たれて、穏やかな眠りの状態にある。これがルターの確信の核であり、慰めの手紙において必ず触れられている事柄である。死者は静かに眠っているので、生者が死者の救済のために祈ったりミサを捧げる必要はもはやない。しかし他面において、それは生者と死者との繋がりを実感させる具体的な媒介がなくなったことをも意味する。ルターにとって死者との繋がりは、「肉においては」死者への追憶であった。先ほど引用した1542年9月23日付の次女の死を知らせるヨナス宛て書簡で、そのことが述べられている。それから2年以上たった1545年6月3日付のアンドレーアス・オジアンダー宛書簡でも、マグダレーナのことを次のように語っている。

あなたが再び十字架に、奥様と愛する娘さんの死を通じてまさに二重の十字架に見舞われたということをお聞きしました。私は自分の愛する娘の死によって知っておりますが、あなたの悲しみはいかばかりでしょうか。奇妙に思われますが、私は今なおマグダレーナの死を悼んでおり、彼女のことを忘れることができません。しかし、彼女は天国にいて、そこで永遠の命をもっていることを確かに知っています<sup>8)</sup>。

オジアンダーはニュルンベルクの宗教改革者で、その時、ペストの流行により、二度目の妻と娘を同時に失うという悲劇に見舞われた。最初の妻が1537年になくなった時もルターは慰めの手紙を書いているが、現在残っていない。死者との繋がりよりも重要なのは、来世における死者との再会の希望である。ヨナス宛ての慰めの手紙では、第三パラグラフで「来世において私たちは再会し、集められ、私たちが愛しご自身の血と死によって私たちのために永遠の生命を獲得して下さったお方との最も甘美な交わりに入れられます。」と語っている。このように死者との繋がり、祈りやミサの儀式を通じて死者の救済に参加することから、死者を個人的に覚え、来世において再会することを希望するという、内面化されたものとなっていった。

ルターは1517年から1530年にかけて、信仰義認論にたつて、生者から死者への働きかけを否定していった。そのことにより実践的問題として、両者の新たな関係づけが必要となった。ルターは死者は感覚のない状態で眠っていると考える。このことはふたつのことをもたらす。ひとつは煉獄で苦しむ死者というイメージを追い払い、死に纏わりついていた恐怖と不安を取り除くことになった。もうひとつは、死者と生者との直接的な繋がりはなくなり、生者にとって死者は追憶と再会の希望の対象となり、両者の繋がり内面化したことである。

この章の最後にもう一点、述べておきたい。近親者をなくすことは、様々な苦難のひとつである。それゆえ生者と死者との関係という視点からでなく、苦難一般という視点から遺族を慰めることもありえる<sup>9)</sup>。ドレスデンの教会の監督であったヨハネス・ケラリウスが死んだ時、その夫人に送ったルターの手紙はそのような視点から語られている。そこには、後に『ハイデルベルク信仰問答書』の有名な、第一問「生きるにしても死ぬにしてもあなたの唯一の慰めは何ですか」とその答え「それは、生きるにしても死ぬにしても、私が、からだも魂も私のものではなく、私の真実な救い主イエス・キリストのものであることです」<sup>10)</sup>に繋がる思想が、すでに適切に表現されている。

あなたの悲しみは人の子らの下で味わわれたものの中で最大の悲しみではありません。百倍もの苦しみに耐えなければならなかった多くの人々がいます。しかも、私たちの地上のあらゆる苦難 (leiden) を積み重ねても、神の子が私たちのため、私たちの救いのために無実にもかかわらず受けられた受難 (leiden) に比べれば、無に等しいものです。なぜなら私たちの主であり救い主であるキリストの死に比較されるいかなる死もありません。私たちはすべてキリストの死によって永遠の死から救われているのです。

どうぞ、あなたと私たちすべてのために死んで下さった主、私たちよりも、私たちの夫や妻、子ども、すべてのものよりもはるかにすぐれた主にあって慰められますように。なぜなら、死ぬにしても生きるにしても、貧しくても富んでいても、たとえいかなる状態にあらうとも、私たちは主のもです。そして私たちが主のものなら、主もまた、彼ご自身と彼に属するすべてのものとともに、私たちのものであります<sup>11)</sup>。

注)

1) Martin Brecht, Martin Luther, Bd. 3, 1987, S. 368-371.

- 2) WA Br. 10, 227-228, Nr. 3829.
- 3) ルターは1528年8月5日にN・ハウスマンに、「私の小さな娘エリーザベトが息を引き取りました。彼女は私に何と病弱でほとんど女性のような心を残したことでしょうか。彼女を失ったあまりの悲しみに私は打ちのめされています。父親の心が子どもに対してそのように敏感な感情をもちうるとは以前なら信じられなかったでしょう。どうか私のために主に祈って下さい。」と書き送っている。WA Br. 4, 511, Nr. 1303.
- 4) WA Br. 10, 149-150, Nr. 3794.
- 5) WA Br. 10, 699, Nr. 4049.
- 6) WA Br. 6, 213, Nr. 1876.
- 7) WA Br. 6, 301, Nr. 1930.
- 8) WA Br. 11, 114, Nr. 4122.
- 9) ルターにおける苦難の意義については、中谷博幸「ルターと親鸞における苦難と信仰—宗教的パトスの一類型—」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第10号、2005年、81-94頁参照。
- 10) *Bekenntnisschriften und Kirchenordnungen der nach Gottes Wort reformierten Kirche*, hrsg. v. W. Niesel, Zürich, 1985, S. 149.
- 11) WA Br. 10, 63-64, Nr. 3751.

#### 第四章 告別説教における死生観

##### 第一節 ザクセン選帝侯ヨハンの葬儀における説教

第三章で考察した手紙は、その一部はまとめられて公刊されることとなるが、もともと個人的な私信であった。第三章で考察した生者と死者との関係をルターが公にして広く知らしめたのは、葬儀における説教によってであった。ルターは生前、二人の主君の死に遭遇している。最初は1525年5月のザクセン選帝侯フリードリヒ賢侯の死であり、もうひとつは1532年8月の同じく選帝侯ヨハンの死である。ルターはそれぞれの葬儀において、ドイツ語による説教を行なった。

フリードリヒ賢侯は1525年5月5日に死亡し、同月10日にメランヒトンによるラテン語の追悼演説が行なわれ、次いでルターのドイツ語説教がなされた。翌日新選帝侯の意向で、ルターは新たにドイツ語説教を行なった。この葬儀はルターをはじめヴィッテンベルク大学やザクセン選帝侯国宮廷にとって、福音的葬儀がどうあるべきかを示す重要な意味合いをもっていた。宮廷説教者シュパラインは、従来行なわれていた葬儀における儀式をひとつひとつ列挙し、それがふさわしいかどうかルターに問い合せている。非常に簡素な儀式を主張するグループもあったが、実際に行なわれた葬儀では、生者から死者への働きかけを示すミサのような儀式を取り除くものの、従来から行なわれていた、君主の威厳をしめす儀式は実施された<sup>1)</sup>。ルターは1525年5月23日のヨハン・リューエル宛て書簡で、

わが恵み深き君主、選帝侯は、私があなたがたと別れた日の5時と6時の間に、……、穏やかに、はっきりとした意識をもって、亡くなられました。侯はパンとぶどう酒による秘蹟を受けられ、終油は受けられませんでした。私たちもミサや徹夜課を行ないませんでした、おごそかにherlich埋葬されました<sup>2)</sup>。

と報告している。

フリードリヒ賢侯の死後は、その弟のヨハン公が選帝侯についた。しかし彼も七年後に死亡する。1532年8月15日に狩りのためシュヴァイニッツSchweinitzに滞在中、おそらく卒中で倒れ、翌日夕方死亡した。葬儀は日曜日の18日に行なわれ、同日ヴィッテンベルクの城教会に埋葬された。葬儀

の説教はルターが担当した。また22日に新しいザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒの求めに応じて第二の説教を行なっている<sup>3)</sup>。本稿のテーマとの関わりで重要なのは、ヨハン公の18日の葬儀の時に行なったルターの説教である。ここに表明されているルターの死生観を次に検討したい。

ルターはまず説教の重要性を語る。死者のためのミサは廃されたが、説教は無くすべきではない。それは神を誉め讃えたり、人々を改善することができる。ルターは葬儀の中心に説教をすえようとした<sup>4)</sup>。

次いで選帝侯を失った嘆きを述べる。古代の異教徒の一部では、知人や親しい人が死んだ場合、嘆いたり泣いたりしないことが徳であると考えた。また現在の熱狂主義者も、自然的なものを排除して、父や母、息子、娘が死んでも、泣いたり心を乱したりしてはならないという。しかしルターによれば、それは作られた徳であり、神の喜び給うことではない。神は、石や木となるようには人間をお造りにならなかった。神は人間に五感を与えられた。そして、友人を愛し、敵に怒り、愛する友人に不幸が生じた場合に嘆くという「肉の心」を与えられた<sup>5)</sup>。ルターがこのように嘆きを大切にすることは、すでに第三章において慰めの書簡で確認したとおりである。

しかし嘆きには限度がなければならない。なぜなら選帝侯は今や苦しみのなかにいない。選帝侯の肉体は死んで、眠っている。パウロは「テサロニケ人への第一の手紙」[4章14節]の中で、キリストについて、彼は眠ったとは言わないで、死んだと言っている。ルターは十字架上でキリストの死を「真の死」を呼ぶ。それに対して、私たちの死は死ではなく、眠りである。ここでルターはキリスト者の死とキリストの死を区別している。キリストの死が真の死であり、他は無nichtsである。キリストの死よりも悲惨な死はない。キリストは私たちの罪の赦しのために死なれたからである。それに対して私たちの死は、五感の死にすぎない。私たちの罪のためにはキリストが死なれた。[ヨハン] 侯は洗礼によってキリストの王国に呼び出され、キリストを告白し、神の言葉を熱心に心から喜んで聞いた。それ故侯は、ただ五感が死んだだけである。これは半分の死die huelfen von todであり、身体の死である。キリストが侯のために死に、・・・彼は今イエス・キリストにあって、眠りについている<sup>6)</sup>。

以上のようにルターはキリストの「真の死」と私たちの眠りとしての死を対比的に述べるが、同時に私たちも地上で「真の死」を味わうことにも言及する。ヨハン侯は生前それを経験した。1530年のアウクスブルク帝国議会で、選帝侯は、悪魔の誘惑の中、「キリストの死と復活の告白から離れることなく、そのために多くの禍と恥辱に耐えた。」<sup>7)</sup>

あなたがたはみんな、侯がキリストに従って二年前アウクスブルクで死んだこと、真の死をこうむったことを知っている。それは侯自身のためではなく私たちすべてのためであった。そのとき侯は、悪魔が注いだ悪しきスープと毒を飲まねばならなかった。これこそが、悪魔が人を憔悴させる怖ろしい真の死である。選帝侯は全世界の前で公にキリストの死と復活を告白され、それと固く結びつき、土地と人々を、実に彼自身のからだといのちをそれに賭けられた。この死がいかに難しいことであるかを、彼は確かに心に感じていた。この告白が今や明らかになっているので、私たちは、そのことのゆえに、彼をキリスト者として賞賛する<sup>8)</sup>。

ルターは、「暴君や暴徒からさらに私たち自身の良心と悪魔から」、イエス・キリストを否定する可能性のある場に立たされること、それにも関わらずイエス・キリストへの信仰告白を明確にすることを、人間が地上で経験する「真の死」と呼んでいると考えられる<sup>9)</sup>。この「真の死」は、第二章の第三節「煉獄批判」で「実存化された煉獄」と呼んだものと内容上繋がりががあると思われる。第二章で確認したように、ルターは二つの煉獄を考えていた。ひとつは死後における浄罪の場として

の煉獄で、カトリック教会が一般に煉獄と呼ぶものと同じであり、ルターはこれを1530年までにはっきりと否定した。もうひとつはM・プレヒトが「実存化された煉獄」と名づけたもので、ルター自身は「煉獄と考える地獄」とか「地獄の味わい」とか、「別の煉獄」と呼んでいる。これは死後ではなく、地上で経験する。地獄の罰は永遠に続く「動揺、おそれ、おののき」、絶望であるが、この世においてそのような地獄の罰を一時的に味わうことが、ルターの言う「煉獄と考える地獄」である。そしてルターはそのような地獄の味わいを、アブラハムやモーセ、ダビデ、ヨブ、エゼキエルらの信仰者とともにキリストも経験したと言う。それゆえ、ルターはこの苦難を肯定的な視点から見えていたと考えられる。1530年までの著作の中でルターはそれを詳細に論じることはしていないので断言はできないが、ルターにおける苦難と救済の弁証法的な関係を考えて<sup>10)</sup>、「真の死」がそのような「煉獄と考える地獄」に繋がるものではないかと、筆者は考えている。煉獄という言葉がもはや出てこないのは、1530年に一般的な煉獄をはっきり否定したからだと思われる。

さらにルターは、選帝侯の生き方と関連して、福音がいかなるものかを説明し、福音的教説による死への備えの大切さを語る。自分がいかに義しいか、いかに生きたか、いかに統治したか、このように問うことは、悪魔の策略である。この時人は、不安と絶望にいたる。特に死の間際に自分がどう生きたかを問うてはいけない。悪魔はそこにつけ込み、私たちの良心を恐れと絶望へと追いやる。悪魔とそのような論争をするべきではなく、キリストが私のために苦難を受けられ、私の罪のために死なれ、そして甦られたことを学ばねばならない。そしてそのための徴として、洗礼、福音、御言葉と sacrament をもっている<sup>11)</sup>。

最後にルターは、説教の焦点を葬儀に参列している会衆にあわせ、福音的生き方をすすめる

今や論じるべき時ではなく、イエス・キリストが私のために亡くなられて復活されたという御言葉をもって慰めることが大切である。……死は今後もはや死ではなく眠り、そう何も夢を見ない深い眠りと呼ばれるべきである。私たちの主君も疑いもなく甘き眠りの中におられ聖なる眠り人 heiligen Schleffer の一人となられた<sup>12)</sup>。

私たちは自分自身や自分の義にたよることなく、キリストの死と復活を信じ告白するならば、たとえ世の十倍の罪を犯したとしても、キリストの復活にあずかることができる。ルターはこの葬儀を次の言葉で結んでいる。

それ故、あなたは自らを低くし、その生活を改めよ。そうすれば侯と同様に、キリストとともに苦難を受けて死んだ人々の中にあなたも数えられるだろう。あなたがたの多くが、ヨハン侯がアウクスブルクでそうしたように死んで苦難を受けることを、私は望んでいる。その時あなたがたも安らかに死ぬことができるだろう<sup>13)</sup>。

この説教は、カトリック的葬儀からの転換をよく示している。葬儀はもはや、死者のためのミサのように死者の救済にかかわる出来事ではなく、逝った人々を嘆き悲しみ、残された人々に死の備えの大切さを訴え、再会の希望を確認する機会となった。葬儀は死者のためのものから生者のためのものにかわっていく。

## 第二節 死への備え

ルターがヨハン侯の告別説教で、死の間際に自分がどう生きたかを問うてはならないと言っていることは、当時のカトリック教会が、臨終の悔い改めを強調していただけに重要である。ルターに

よれば、そのことはかえって死にゆく人々の良心を恐れと絶望へと追いやることであった。このような考えをルターはすでに、1519年の『死への備えについての説教』(*Eyn Sermon von der Bereytung zum Sterben*)<sup>14)</sup>で詳しく展開していた。その内容をここで補足しておく。

ルターは死には三つの側面があると考え。第一に死は、「この世からの身体的ないし外的な別離」であるので、特に財産に関して、残された人々の間で財産をめぐる争いが起こらないように、備えなければならない。第二に死は、人々との別れであるので、人々と和解して死なねばならない。そのために特に仲違いをしていた人との和解が必要であると説く<sup>15)</sup>。第三に死は神との関係において生じる。この点が『死への備えについての説教』の中心部分である。

この第三の死に関して、中世末からルター当時にかけて、第一章で述べたように、臨終における悔い改めが強調された。しかしこれは危険であるとルターは考える。人間は「臆病で無気力な性質」なので、死の恐るべきイメージ (*bild*) と罪の戦慄すべき様々なイメージ、および地獄と永遠ののろいのたえがたい避けがたいイメージという三つのイメージを臨終の時に思い浮かべると、死を恐れ、かえって神に不従順になるからである。たとえば、罪のイメージについて次のように語っている。

罪も、またあまりにこれを見つめすぎたり、あまりに深く考えすぎると、増大してくるものである。それに、私たちの良心が弱くて、自ら神の前に恥じたり、はなはだしく自己を責めたりすると、ますますその勢いを助長することになる。・・・そのために人はまたしても絶望におちいり、死をいとうようになって、結局神を忘れ、死に至るまで不従順にさせられるのである<sup>16)</sup>。

死・罪・地獄のイメージが恐怖を与えるのは、ルターによれば、人間は正しい存在ではないからである。死は、日常生活でごまかしている、自らの実体、その罪をつきつける。しかしルターにとって死への備えとして重要なのは、次の二点であった。第一に、死・罪・地獄の脅威はすでにキリストの十字架と復活によって解決されていることを知ることである。「キリストの生命は私の死をご自身の死において克服し、キリストの服従は私の罪をご自身の受難において根絶し、キリストの愛は私の地獄をご自身が見捨てられたことにおいて破壊したもうた。」<sup>17)</sup> 死と罪と地獄を、それぞれ自身において見るのではなく、また自分自身において見るのではなく、キリストにおいて見ることである。死と罪と地獄のイメージ (*bild*) がキリストの十字架における三重の姿 (*bild*) によって克服されていることをおぼえることが大切である。第二に、そのことは、死に直面してではなく、日常の生活の中で、なされなければならない。すなわち、日常の生活においてキリストの姿 (*bild*) を自らの中に形成していく (*bilden*) ことが大切だとする。このようにルターは、死の備えを、臨終の時から、日々の生活におけるキリスト教的生の形成へと方向転換させようとした。ヨハン侯の告別説教は以上のような考え方が前提となっているのである。

注)

- 1) Martin Brecht, *Martin Luther*, Bd. 2, S. 182f.; Craig M. Koslofsky, *The Reformation of the Dead. Death and Ritual in Early Modern Germany, 1450–1700*, p. 89; WA Br. 3, S. 487f.
- 2) WA Br. 3, 508, Nr. 874.
- 3) Martin Brecht, *op. cit.*, S. 410f.; WA 36, XX–XXIV.
- 4) WA 36, 237.
- 5) WA 36, 238–239.
- 6) WA 36, 240–245, 249.

- 7) WA 36, 249.
- 8) WA 36, 246.
- 9) WA 36, 246-247.
- 10) 中谷「ルターと親鸞における苦難と信仰—宗教的パトスの一類型—」参照。
- 11) WA 36, 251-253.
- 12) WA 36, 252.
- 13) WA 36, 254.
- 14) WA 2, 685-697. (『著作集』第1巻、福山四郎訳 579-602頁。) なおこの説教は、語られた説教ではなく、ザクセン選帝侯宮廷顧問のマルクス・シャルトの依頼によって執筆したものである。
- 15) WA 2, 685 (『著作集』第1巻、579頁。)
- 16) WA 2, 687 (『著作集』第1巻、583頁。)
- 17) WA 2, 693 (『著作集』第1巻、593頁。)

## 第五章 「卓上語録」における「死者」と悪魔

### 第一節 「死者」の存在と悪魔の働き

ルターはカトリック教会との論争において生者の死者への働きかけを否定した。近親者をなくした遺族には、死者は煉獄の苦しみの中ではなく、平安な眠りの状態にいると語って慰め、再会の希望に生きるように励ました。そして葬儀の説教では、一般の人々に対して、臨終の時になって急に死後のことや自らの生活の在り方や救いについて考えるのではなく、日常生活において福音に生きることを訴えた。しかし当時の人々にとってなお大きな問題があったと思われる。それはなかなか死にきらない「死者」の存在である。

ルターは「死者」の出現を著書や遺族への慰めの手紙では明確に記すことはなかった。すでに明らかにしたように、ルターは死を眠りと考えたので、死者がこの世に現われることはありえないことであった。しかしもし、「死者」や幽霊を見たという者がいたとすれば、どう考えるべきなのか。たとえば、元ヴィッテンベルク大学学長でルター支持者となるが、後にルターと対立してザクセン選帝侯国を追放されたアンドレーアス・カールシュタットが、1541年12月24日にバーゼルで死んだとき、彼の墓に幽霊があらわれたといううわさがたった。これはバーゼルの出版者J・オポリンからライプツィヒ大学教授のJ・カメラルを通じてヴィッテンベルクに伝えられた<sup>1)</sup>。しかしルターは、「ある友人がバーゼルから、カールシュタットが死んだと書いてきました。彼は不可思議な物語を付け加えています。ある幻影spectrumが彼の墓に出てきて家のあたりを徘徊し、石の固まりやかけらを投げつけて非常に騒がしいと断言しています。アッティカの法によれば死者のことを悪く言うのはゆるされていません。それゆえ私は何も付け加えることをしません。」<sup>2)</sup>と、慎重にコメントを避けた。

ところが『卓上語録』では、「死者」の出現について踏み込んだ発言が記されている。「はじめに」で述べたように、『卓上語録』はルターが語った言葉を様々な人が記録し編集したものであるため、そこに記されている内容がどの程度ルターの真意を伝えているかということが議論となってきた。特にJ・アウリファーバー(1519-75)の編集には恣意性が指摘されている<sup>3)</sup>。しかし編集者がルターの見解をどのように理解していたのか、また特にアウリファーバーの編集した語録は多くの人々に読まれたので、人々がルターをどのようなかたちで受容したのかを知るには、好都合である。しかも『卓上語録』には、ルターの著書や書簡では触れていない「死者」の出現を語っているので、この問題についてのルター周辺の人々の受け止め方を知るには貴重な史料である。以下においては、そのような視点から『卓上語録』を若干扱うことにする。

死者の出現について、たとえば、早くからのルターの協力者であり、1524年以降マグデブルクの監督であったニコラウス・フォン・アムスドルフの次のような話をルターは紹介したという。アムスドルフが宿にいたとき、以前に死んだ二人の貴族が二人の子どもとともに彼の部屋にやって来て、彼を起こした。彼が起きると、彼らは彼に手紙を口述筆記させ、その手紙をブランデンブルク選帝侯ヨアヒム一世に渡すように命じた、という<sup>4)</sup>。

またルターは、ザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒから直接聞いた次のような話をしたという。ある貴族の若い妻が死んで葬られた。しかしその後その妻が彼のベッドにあらわれた。誰かと問う貴族に、彼女は「あなたの妻です。あなたの呪いのため、あなたの罪のために死なねばならなかったのです。」と答えた。二度と彼女を呪わないという約束で彼女はもう一度彼の妻となり、子どもも生んだ。ある夜、客を招いて晩餐の時をもった。食事の後、妻は胡椒入り菓子を取りに出て、なかなか戻ってこなかった。そこで彼は怒ってののしると、妻は消えた<sup>5)</sup>。

死者は眠っており、死者と生者との間には交流はなく断絶しているとルターは考えていたので、死者の出現も働きも認めない。では、上に述べた例に見られるような「死者」の存在をどのように考えるのであろうか。

『卓上語録』では、「死者」が現われるという「現象」自体は否定せず、ただそれらを悪魔の働きと理解することによって、断罪する。アムスドルフの話について、アウリファーバーの編集によれば、ルターは、「多くの話や書物の中で、悪魔がいかにじっとしていないかを知る。……悪魔は私たちが考える以上に私たちの身近にいる。彼が人間の魂と霊を麻痺させ欺くことができるとすれば、それ以上に身体を惑わしそれに取り憑くことができる。」<sup>6)</sup>とコメントした。また、ヨハン・フリードリヒ侯の話については、その妻も子どもも悪魔であり、「それは、サタンが子どもを産むほど人々に取り憑くことができるというぞっとするような怖ろしい実例である」<sup>7)</sup>と語っている。

先ほど述べたカールシュタットの話について、カメラールと親しかったメランヒトンは、慎重なルターとは少し異なり、「幽霊は悪魔があえてするからいか神を信じぬ民衆のあざけりであろう」とカメラールに返信している。『卓上語録』の二つの例と考えあわせると、ルターサークルの間では、「死者」の出現は悪魔の働きと理解されていたと考えてよいであろう。

## 第二節 自殺の理解

著作や書簡では明確に触れられていない「死者」の出現を、『卓上語録』では、死者自身ではなく悪魔の働きであると理解した。もちろん、著作や書簡においても悪魔の働きは強調されている。しかしそれは、一般に「人間の魂と霊」への働きであった。『卓上語録』では、人間の身体・物質への悪魔の働きが具体的に述べられる。それは人間の「身体を惑わしそれに取り憑くこと」にまで及ぶ<sup>9)</sup>。そのような相違は、両者の自殺についての扱いにも見ることができる。

ルターは、明確な意識をもってなされた自殺については、神を否定するものとして、批判していた。たとえば、1527年12月10日のユストゥス・ヨナス宛書簡で、ハレの枢機卿アルブレヒトの顧問官J・クラウスの自殺について触れ、彼の自殺が理性によって意識されて静かになされたので、最後の段階での悔い改めはなかった、と判断している<sup>10)</sup>。しかし、意識の混乱状態で為された場合は、悪魔の働きによるものと考えた。1528年12月15日付マルガレーテ宛て書簡は、その問題を扱っている。この女性の姓は不明である。ルターはマルガレーテの息子と知り合いであったようで、彼からマルガレーテの夫の自殺の様子を聞き、次のような慰めの手紙を書き送った。

まず慰めとなるのは、ご主人はそのように困難な闘いの中に立っておられましたが、最後にはキリストが勝利なさったことです。さらに、ご主人は判断力のある状態で私たちの主に対す

るキリスト者としての告白をもってなくなりました。私自身そのことをお聞きしてとても喜んでおります。キリストご自身も〔ゲッセマネの〕園でそのような戦いをなさり、最後には勝利され、死者から復活されました。

ご主人が自らを傷つけられたことは、悪魔が肢体を支配しており、ご主人の手をその意志に反して動かしたのかもしれませんが。ご主人がそれを自らの意志でしたのであれば、正気にもどってキリストへのあのような告白をされなかったでしょう。悪魔はなんとしばしば腕や、首、背中、そしてあらゆる四肢を折ることでしょうか。彼は私たちの意志に逆らって、からだと四肢を支配することができます。

.....

ご主人は、ある人たちに起こったようには、戦いと絶望にとどまることなく、神の恩寵によって救い出され、ついにはキリスト教信仰とみ言葉を信頼いたしました。この大いなる恩寵の故に神に感謝して下さい。それについては、次のように〔聖書で〕語られています。『主にあつて死ぬ死者は幸いです。』〔黙示録14・13〕キリストご自身もヨハネ伝11章で、『私を信じる者は、死んでも、生きる』と語られています。父なる神がイエス・キリストにあつてあなたを慰め力づけてくださいますように<sup>11)</sup>。

一方『卓上語録』には自殺について、ルターの次のような発言が記録されている。

私は自ら命を絶つ者は永遠の罰に定められるとは思わない。その理由は、彼らがそのように望んで命を絶ったのではなく、悪魔の力によって征服されたからである。ちょうど人が森の中で追い剥ぎによって殺されるのと同じである。しかし、サタンに殺害を引き起こす機会を与えないために、このことは民衆 (vulgus) には教えられるべきではない。また彼らを敷居を跨いで外へだすべきではないというような一般の習慣を厳格に守るのがいいと思う。その死は彼らの自由意志や法律によって生じるのではなく、私たちの主なる神が、ちょうど追い剥ぎによってある人を処刑されるように、彼らを処刑される。統治権力はそれらに厳格に対処すべきであるが、魂が永遠の罰に定められているかどうかは、単純ではない。しかしそれらは、悪魔が支配者であった、人は熱心に祈らねばならないということを主が教えようとされるための、実例である。しかしこの実例の故に、私たちは神を恐れてはならない<sup>12)</sup>。

マルガレーテの書簡では、慰めの手紙という性格上当然のことであるが、自殺をはかったことは、正気の状態のことではなく、悪魔が肉体を支配してそうさせたかもしれないので、マルガレーテの夫には責任がないことが強調されている。『卓上語録』でも、自殺は悪魔の働きによって征服された結果なので自殺者の責任ではないことが語られている。しかし強調点は、悪魔の脅威におかれている。「死者」の出現を悪魔の働きとする見解は、悪魔の働きを霊的な面ばかりでなく、具体的身体的に理解し、現実的に悪魔の働きの脅威を絵画的に強調する傾向と結びついているのではないであろうか。『卓上語録』における「死者」の出現や悪魔理解については、本章ではそのごく一部を分析したにすぎない。全体的な理解のための詳細な分析は今後の課題としたい。

注)

1) WA Br. 9, S. 623.

2) WA Br. 9, 622, Nr. 3714.

3) 『卓上語録』の翻訳としては、古くは、佐藤繁彦訳『ルターの「卓上語録」』(グローリア出版、1988年再版)

と前野正訳『ルター「卓話」』(上・下、キリスト教図書出版社、1991年)がある。最近、植田兼義訳『卓上語録』(教文館、2003年)、藤代幸一訳『テーブルトーク』(2004年)の二つの翻訳が出た。アウリファーバーの問題点については、植田訳『卓上語録』の訳者解説、397-399頁参照。

- 4) WA Tr. 3, Nr. 3676, FB3, 67 (24, 93.)
- 5) WA Tr. 3, Nr. 3676, FB3, 67 (24, 94.)
- 6) WA Tr. 3, Nr. 3676, FB3, 67 (24, 93.), S. 517.
- 7) WA Tr. 3, Nr. 3676, FB3, 67 (24, 94.), S. 517.
- 8) WA Br. 9, S. 623.
- 9) ルターと悪魔との関わりについては、H. Oberman, *Luther. Mensch zwischen Gott und Teufel*, 参照。その他、ロベール・ミュシャンプレ『悪魔の歴史 12~20世紀西欧文明に見る闇の力学』大修館書店、187-195頁；J・B・ラッセル『メフィストフェレス』教文館、30-42頁。
- 10) WA Br. 4, Nr. 1180.
- 11) WA Br. 4, Nr. 1366.
- 12) WA Tr. 1, Nr. 222.

#### おわりに

公刊された著作とともに、個人的な書簡、説教、親しい人々に語って書き留められた語録、それぞれにあらわれるルターの死生観を検討してきた。それに基づき、ルターの生者と死者の関わりを中心とする死生観の展開を次のように考えることができるだろう。

宗教改革は贖宥批判から出発した。贖宥は15世紀末には、煉獄における死者へも有効であると考えられていた。ルターは信仰義認論からその贖宥の有効性に批判を向ける。同時にミサ批判を展開するが、そこから、死者への働きかけをルターは否定していくこととなった。

死者への働きかけの否定とともに、ルターは、死者の魂は煉獄で苦しんでいるのではなく、平安のうちに眠っていると考えた。それとともに死後の恐怖は薄らいでいく。この死を眠りととらえる理解が、1530年代から1540年代前半にかけて、人々の魂への配慮を必要とする近親者をなくした人々への慰めの書簡や告別説教の中心にすえられた。その結果、死者への働きかけから生者がいかに生きるかという点に重点が移っていく。具体的には葬儀の性格が大きく変えられていく。葬儀は死者の救済のためのものから生者に福音的教義と生き方を訴える機会となっていった。死への備えも臨終の時ではなく、生きている時に死をおぼえてキリスト教的生を生きることが大切とされた。死者との関わりは、死者のために具体的に目に見える、ミサを行なったり祈禱を捧げたりする関係から、死者を追憶し、死者との再会を希望するという内面化されたものへと変化を迫られていった。

しかし以上によっても、「死者」の出現という問題は残った。書簡においては、ルターはこの問題に触れていない。しかし人々にとってこの問題は残った。それが、『卓上語録』において取り上げられていく。『卓上語録』がどの程度ルターを正しく理解しているかはともかく、ルター周辺の人々がその点についてルターの見解をどう受け止めていたかは、理解できるであろう。

『卓上語録』では、死者の出現という現象は否定されることなく、悪魔の働きであると理解された。このような理解は、今後詳細な分析が必要であるが、悪魔の霊的働きではない、実際の物質的働きが強調されていくことと関連していると思われる。こうして、プロテスタント・ドイツにおいて、ファウスト伝説の下地が形成されていくと思われる<sup>1)</sup>。

#### 注)

- 1) 既に死んでいた預言者サムエルを、サウル王が女霊媒師によって呼び出したという聖書の記事について、

ルターはそれを悪魔の幻影であると考えた。また、同じ時の会話として、アウリファーバーは、Johann Trithemius、Abt von Sponheimが皇帝マクシミリアンの前に、歴代の皇帝や英雄を生きていたときの様で、出現させたことを記している。そこにはアレクサンダー大王やカエサルも含まれていた。このTrithemiusを魔術師、妖術師 (Zauberer, Schwarzkuenstler) と呼んでいる。WA Tr. 4, Nr. 4450 FB3, 72 (24, 98.)